
カプット・シュレー（学校崩壊）

syuutana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カプット・シュール（学校崩壊）

【Nコード】

N8987V

【作者名】

syutana

【あらすじ】

坂口ケンゴは私立蒼海高校の一年生。長かった夏休みも終わり、一ヶ月ぶりに登校した彼だが、学校で顔を合わせたクラスメートや教師たちの様子が普段と“何か違う”ことに気が付く。気になるあまり彼が調べまわった結果、“何かが違う”のは生徒や教師ばかりでなく、この学校全体だった。彼の学校を元に戻すための長い戦いが始まる。

始まり（前書き）

原作者になろう！に投稿し損ねた作品です。

小学生向けというよりは青年向けかもしれませんが、読んでいただけると

嬉しいです。ちなみに初投稿です。どうぞよろしくお願いします。

始まり

九月一日、水曜日。清々しい小鳥のさえずりとは裏腹に蒸し暑い朝が始まった。

「ううん、暑い……」

坂口ケンゴがこの朝一番に発した言葉は誰にも届かず、彼はため息をつきベッドから抜け出して朝食を作り始める。

しかしこれは彼の日常だ。彼の父親は世界を飛び回る営業マン、母親は彼の幼いときに帰らぬ人となった。当然家にいる機会は少なく、

もっぱら彼は親からの仕送りを受け一人で生活している。

今日は楽しかった夏休みもついに終わり、また学校が始まる日。

いつもならクラスメートと顔を合わせるのを楽しみに、学校へ向かうのだがこの日は少し違った。

学校に着いた彼は校門に立ってる教師に向かって、

「おはようございます」

とごく普通に挨拶した。いつもなら教師も、

「おう、おはよう」

と返してくれるのだが今日はなぜか、

「あ、ああ……」

と腫れ物にでも触れるような様子で返してきた。

ケンゴは一瞬、不審に思ったが、その時は特に気もせず自分の教室に向かった。

彼は教室に入って自分の席につき、隣の席の生徒に軽く挨拶した。

「よう、久しぶり。元気してた？」

しかし、その生徒はケンゴに話しかけられるなり、驚いた顔をしないで、

「あ、ちょ、ちょっと職員室いってくるな」

といって席を立ていってしまった。

「なんだ？ 変な奴だな」

ケンゴは自分の顔に何か付いてるのかと思い、トイレの鏡で確認してみたが、特に何も無いようだった。

教室に戻り、ケンゴは入学当時から仲のいい、黒岩悠斗くろいわゆうとに声をかけてみた。

「久しぶりだな。お前、夏

休みの心霊特集見てたか？ ありや怖かったよなー」

しかし、悠斗は話題にのるどころか気まずそうな顔を見せてどこかへ立ち去っていつてしまった。

そこでケンゴは、

「何かおかしい…

と思い、考え始めた。

（夏休み前までは皆普通に接していたはずだ。何かがおかしい、何かが…まさか、俺は避けられているのか？

いや、急にそんな事になるはずがない。黒岩の奴とは昨日もメールをしていたはずだ。やっぱり、何か分からないが、異常だ）
キンコンカンコン

そこまで考えたところで始業のチャイムが鳴り、担任の先生が入ってきた。

「はいはい、号令お願いしまあす」

かつてないぐらい担任がいい加減に号令を要求した。

「は？ どうなってんだ？」

「起立！ 礼！」

「おはようございます！」

「着席！」

しかし、怪訝な顔をするケンゴとは裏腹に学級委員が号令し、みなもそれに従う。

まるで、それが当然の事だ、というように。

「おいおい、うそだろ？」

しかし、この空気についていけないのは、明らかにケンゴの

みであつた。

「えーっとまあ今日の予定を説明します。まずこの後すぐに始業式がありましてですね……」

これまた担任はいい加減にホームルームをはじめた。

ケンゴはあまりのいい加減さにあきれてしまい、途中から話を聞く気も失せてしまった。

「くそ、なんなんだ一体。色々とおかしいだろ。何がどうなってるだ？」

話を聞きそびれてしまったケンゴは、列の最後尾について、大勢に帯同するような感じでなんとなく始業式の会場についていった。

何とか始業式の会場に着いたケンゴは周りを見渡し、どうかみんなが普通の状態である事を祈った。

（やっぱり今はみんな普通だな）

しかし、ケンゴが安堵したのも束の間、始業式が始まり、校長の話が始まると周囲の空気は一変した。

始まり（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

うわ、文章下手wwwwなど思うことがありましたらどんどん書き込んでいただけると幸いです。

次回も出来るだけ早くあげていくつもりです。

今後ともよろしくお願いいたします。

驚愕（前書き）

前に投稿した「始まり」の続編です。

前作をよんでいただければよりよく物語が理解できると思います。

驚愕

「皆さん！ おはよう！ 夏休みは元気に過ごせたかい？ 先生はいっぱい旅行に行っちゃったよ！ さあ、これから元気に学校を過ごしていこう！ 以上」

「へ……？」

あまりにぶっ飛んだ内容に、ケンゴは硬直してしまった。

しかし、周りの生徒は、いやケンゴをのぞいたすべての生徒はあきらめるどころか、大真面目に

話を聞いていた。

ケンゴが硬直している間にも着々と始業式は進んでいき、ついに誰も異議するものもなく、

始業式は終了した。

「一体全体どうなっているんだ？ 学校全体が、俺以外の全てがおかしいぞ！」

教室に帰る途中の廊下で思わず叫んでしまったが、そんな事さえも誰も気にせずに教室への道を急いでゆく。

「わかったぞ！ みんな無関心なんだ。校長の説明がおかしなくても、担任の先生の話がいい加減でも、とにかく異常な事に無関心だからおかしいんだ！ しかし、なぜだ！ どうしてこうなった？」

一人の上級生がケンゴの肩にぶつかつた。しかし気にする風も無く、その上級生はケンゴを追い抜いていった。

ケンゴは教室に戻るといい加減な担任のホームルームをやり過ごし、案の定いい加減だった掃除も終わらせ、家路に着こうとしていた。

なんとなく他の生徒とあまり顔を合わせなくなかったので、少し校内で道を替え、理事長室の近くを

通りかかったときだった。

いつもは理事長以外誰もいないはずの理事長室から、珍しく人の声がした。

それも理事長のほかに二人。

怪しい……と感じたケンゴは少しだけ開いている扉の隙間に片目を押しつけ、様子を伺った。

理事長室の中ではいずれも黒いスーツを着た男女が理事長に何らかの報告をしているようだった。

「しかし、システムの導入はうまくいったのかね？ みつばし 三星くん？」

「はい、理事長。各担任、校長までもがあの様な発言をし、かつ何も各方面から

批判が来ないという点では大成功といえるでしょう」

三星と呼ばれた男の答えに、理事長は怪訝な顔をしたようだった。

「という点、という事は何らかの問題があったのか？」

理事長のこの問いには女のほうが答えた。

「はい、一人だけ適合条件にあてはまらない者が……」

「一年に親のどちらかと十日以上接触している、という条件に反するものがいたのか？ ありえん」

そこまで聞いて、ケンゴはその不適合者が自分だけであることに気づいた。

「不適合者が一人でもいては私たち学校側の計画に支障が出る、速やかに排除するか、システム条件をもっと厳しくして、何とかしろ」

「システム条件をこれ以上強くするのは時間がかかります。速やかに排除するしかないかと」

「では、刺客を送り込むのか？」

「表ざたになつては困ります。社会的に抹殺しなくてはなりませんね」

「さて、外に誰がいる……！ おい、貴様は誰だ！」

驚愕（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
お楽しみになれましたでしょうか？
次の作品もすぐ上げていく予定です。

逃走、そして襲撃

（感づかれたか！）

ケンゴは素早く身を翻すと後を振り返らないようにして家への道を急いだ。

息を切らせて家にたどり着いたケンゴは、途方にくれていた。

「これからどうする……！ 理事長の言い様だとすぐに何かしらやってくるだろうが対処しようがない」

そんな時、ポケットの携帯電話が鳴り響く。

（……だれだ？）

ケンゴが恐る恐る電話に出ると、声の主は聞きなれた父親のものだった。

「お、ケンゴか。元気でやってるか？ 実は今度珍しく長期休暇が取れたんでな、久々にお前に会いに帰ることにした」

その言葉を聴いてケンゴはほっとしたが同時にどれくらいの期間家に来るのか心配になった。

「帰るって、どれくらい？」

「大体十日ぐらいだが……なんだ？ 来ちゃまずいことでもあるのか？ じゃあな 来週の日曜からそっち行くから迎え、頼むな」

「あ、ああ」

電話が切れてからケンゴはため息をついた

「狙われてる、なんていえないよなあ……」

その夜はまったく眠れなかったケンゴであったが、予想に反し、次の日、又次の日、と皆が何事にも無関心なこと以外は平和な日々が過ぎて行った。

そうこうするうちに父親が久しぶりに帰ってくる日曜日になった。ケンゴは空港まで父親を迎えに行くため、空港直結バスに乗り、国際空港に向かった。

「あ、親父、こっちこっち」

「おお、ケンゴ、久しぶりだな、ちゃんと元気にやってたか？」

「もちろんさ、まあ早く家に行こうよ」

「そうだな、懐かしい家に帰れると思うとわくわくするよ」

しかし、二人が家に帰ると想像を絶する光景が広がっていた。

「おい、ケンゴ。これはどういうことだ？」

彼らの視線の先には、何者かによってぐちゃぐちゃにされた部屋が広がっていた。

（まさか、理事長の手下が？　しかし何の目的をもって？）

「これには深いわけがあつて……」

ケンゴはこれまでに起こった一部始終を父親に話した。

「そうか、そんなことがあつたか……」

「ああ、俺が思うに理事長はシステムとやらを使って生徒たちをマインド・コントロールしたいんだと思うんだ。何とかそれをとめなきゃ

いけない！　俺以外の生徒は全員システムに組み込まれちゃってるんだ。こうなったら校外の人間に非公式でもいいから

協力してもらわないと十日たったら俺もシステムに組み込まれてしまうんだ。十日以内に、何とか阻止しないと！」

勢い込んで話すケンゴを父親は手で制して静かにうなずき、こういつた。

「じつはな、俺の知り合いに腕利きのトラブルシューターがいるんだ。少し報酬は高くつくがきっちり仕事をやってくれるやつだ。ちようど良く、今この近くに戻ってきているらしい。連絡がつくか判らんがやってみる価値はある」

「親父にそんな知り合いがいたとは初耳だよ。じゃあ連絡は頼んだよ。俺は部屋を片付けるから」

「まかしとけ、マア今日は久しぶりに帰ってきたし、いろいろ話そうじゃないか」

坂口家に珍しく笑い声が響く中、坂口家の目の前の道を明らかに怪しいほどの低速で横切って行った黒塗りのベンツには、

誰も気がつかなかった。
――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8987v/>

カプット・シュレー（学校崩壊）

2011年10月9日13時30分発行